(142) 栃木県日光市中三依の中ノ沢鉱山

前書き　本鉱山跡は、現時点では、探査が不十分と思われ、期待薄の場所である。が、これまでの探査結果を纏めて置かないと、何時の時か再探査をする時に、一苦労をする。再探査なども期待して、ここで一応纏めておくことにした。何時か、より内容のある探査記に書き換えたらと考えている。

参考文献（１）に、この鉱山は４行足らずの文章で紹介されていた。「・・・中三依より男鹿川について遡り、更に中ノ沢を上がる。海抜１０００ｍで付近の地形は険しい。・・・」　が、この案内に従って男鹿川を遡ったら、上三依に行ってしまい、途中に「中ノ沢」はない。中三依より、男鹿川の支流である入山沢を遡ると、上流に「中ノ沢」があるのを地形図で見つけることができた。多分、引用文中の「男鹿川」は、「入山沢」の間違いではなかろうかと考えた。が、これだけでは、裏付けが足らない。また、海抜１０００ｍの値自体にも不信感が募る。

筑波の地質調査所で、参考文献（２）である栃木県地質図（２０万分の１）を入手した。後掲の図３でる。現在の地形図と対応させてみると、中ノ沢の上流、芝草山の頂上の東側に、硫化鉄鉱床の記号がマーキングされているのを見つけた。この地質図には、近傍に、芹沢鉱山、越路鉱山もマーキングされている。この２つの鉱山跡については、本探査記で既報である。マーキングの位置は、正確であった。このことから、中ノ沢鉱山は、芝草山頂の東側の、中ノ沢当たりにマーキングされた場所にあるであろうと判断した。又、中ノ沢に沿って、林道も地形図中に記されていた。（当初、この林道が、中ノ沢鉱山への道であると考えたのであったが。この予想は外れたようである。この林道は「新道」であると判断した。）

この林道は、鉱山への道でもあったろうと考え、ハイキング・トレッキングがてら、探査に出かけた。中ノ沢入口から、徒歩で林道を登っていった。結構広い林道であった。標高１０００ｍ以上の所まで進んだが、残雪が林道に残っており、何の成果もなく、引き返した。雪の消えた時期に再度訪問することにした。

後日、再探査に出かけた。中ノ沢入口にあったゲートが開いていたので、途中まで車で登り上がった。適当な所に車を止め、林道を歩いて先へ進んだ。途中、幸運にも、山菜採りの人に出会った。この当たりに詳しく、鉱山について質問すると、沢の左岸に坑口があると教えてくれたが、出会った時の林道位置は沢より遙かに高い位置にあった。林道から沢に下るにしても斜面も急である。地形図を見ると、林道を上り詰めていくと、林道が沢に近接していることがわかった。周りの探査も兼ね、林道を上り詰めると、沢に出会った。結構広く平坦な沢であった。ここから、沢を下った。途中、教えられたとおり、沢の左岸、河床水準にしっかりとした坑口跡を見つけた。

現地への経路は次の通りである。今市から１２１号を北上していく。五十里ダムを過ぎ、直に中三依地区に着く。右手に中三依駅を見て、橋を通過した少し先で、左折し、狭い村道に入っていく。入山沢に沿った村道を進んでいく。見通し沢を過ぎた先に、中ノ沢林道への分岐がある。ゲートが開いていれば、先に車で進める。ゲートが閉まっていれば、入口当たりに車を置いて、徒歩となる。

鉱山跡として、ただ１つの坑口跡を確認しただけである。坑口近傍を注意して探査したが、他の鉱山跡らしい形跡は何も見つけてはいない。ただ沢脇に、何カ所にもあった石垣組みは気になっている。沢道であったのであろうか？

参考文献（３）の「藤原町史」中に、藤原地区にあった「主な」鉱山の位置を示す図を見つけた。後掲の図４参照。越路、芹沢と並んで、中ノ沢も記されている。と言うことは、かってはそれほど小さい鉱山ではなかったのではなかろうか。坑口が１箇所だけとは思われないのだが。見つけた坑道（写真５、写真６参照）は鉱脈に向かって開削した「通道坑」のような気がしている。今回確認した現地近傍には、見つけた１つの坑口以外に、他の鉱山跡があるように思える。沢に沿って、道らしい石垣組が、上流にもあるので、その先に何かあるのかもしれない。機会があったら再訪したい。

２０１５年４月、５月探査

図１　国土地理院の地図サービスより複写掲載。次の図２に、この部分の南部の地形図を掲載している。これら２枚の地形図を上下に並べてみるとよい。Ｐは車を駐車した場所。Ｅは一応林道の終点。黄緑丸が坑口跡。Ｐ点から坑口跡まで、標高差大凡２００ｍ。徒歩３０分から１時間か。沢は広く、傾斜はなだらかである。沢にはごく希に、微小な黄鉄鉱に汚染された転石はあった。今のところ、余り期待される鉱山跡ではないが、沢登りを楽しみ、山菜を探しながらならば、それほどつまらなくはないであろう。Ｅ点より上流に何かあるのかもしれないが、未探査。

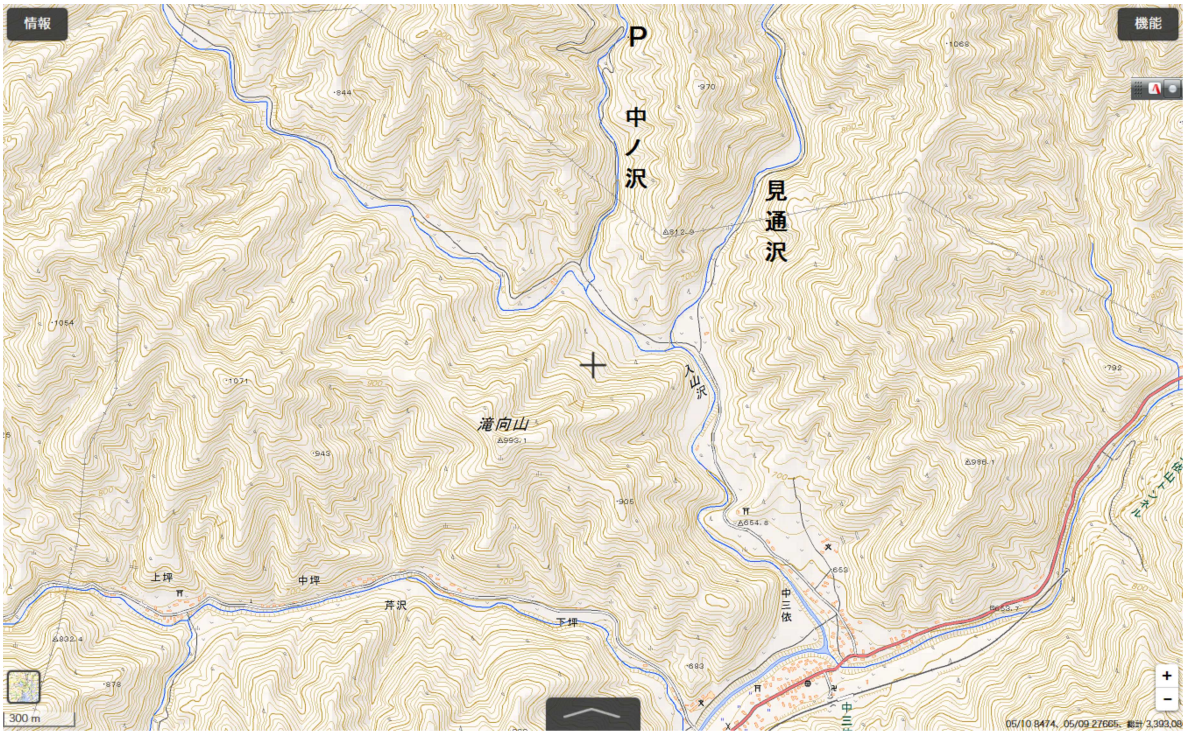


図２　図１の南部の地形図。五十里湖から北上してくる。中三依地区で、入山沢に沿った村道に入っていく。中ノ沢に沿った林道に入って行く。Ｐ点は車の停車場所。その先は、図１を見ること。因みに、中三依地区で、図中の下部の芹沢に入り、西方向に進んでいくと、芹沢鉱山にたどり着ける。本探査記で既報である。

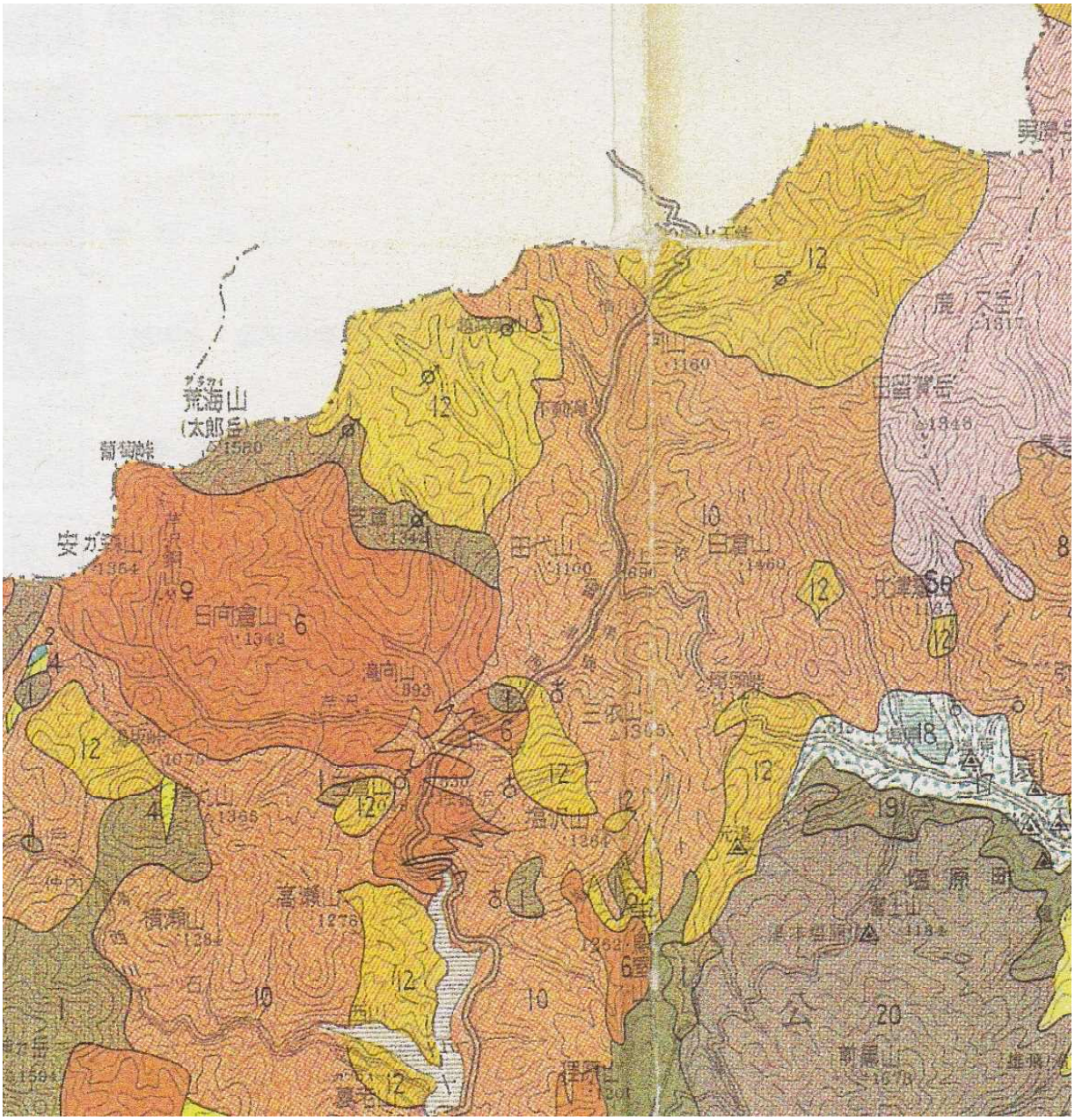
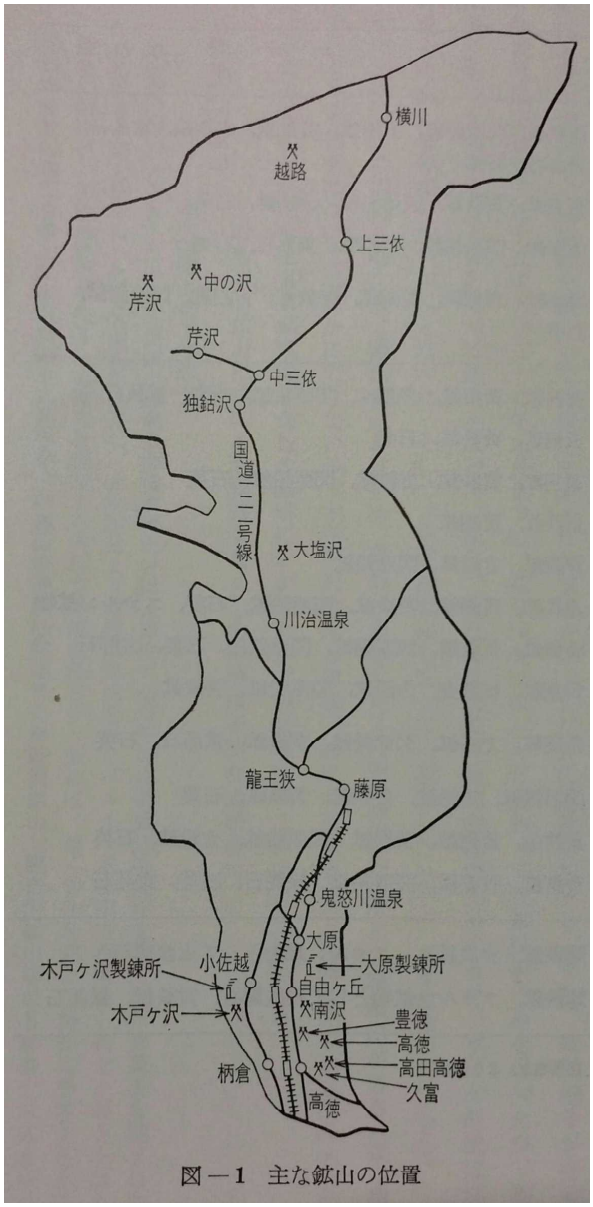


図３　参考文献（２）より複写。栃木県地質図の北西端部分の拡大図。中央左端に芹沢鉱山、中央上端に越路鉱山の名が見える。芝草山頂上の少し右、田代山の左に硫化鉄鉱床の記号（丸に斜め矢印）がマーキングされている。現地形図と対照すると、中ノ沢上にある。且つ標高も１０００m付近でもある。「中ノ沢」鉱山の位置に違いない。



図－1　主な鉱山の位置

図４　藤原地区にあった主な鉱山の位置。参考文献（３）より。越路鉱山、芹沢鉱山と共に、中ノ沢鉱山名が記されている。「主な」と語っているには、中ノ沢鉱山は「極小な」鉱山ではなかったのであろうと思うが。

鉱山跡写真

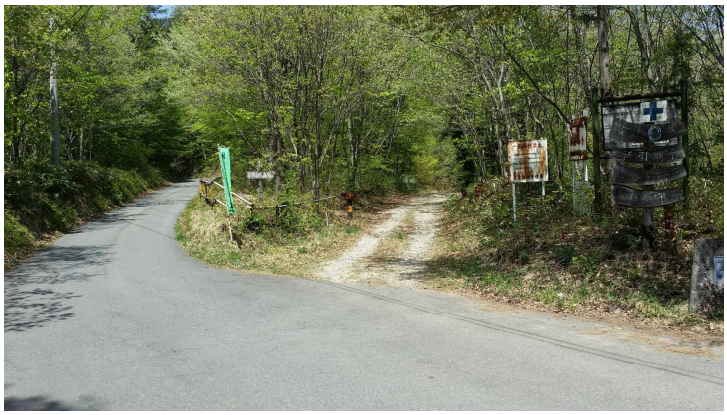


写真１　中三依地区で、１２１号を左折し、入山沢に沿った村道を進んでいく。中ノ沢に架かっている橋を渡ると直ぐに、右に分岐している中ノ沢林道に出会う。この付近に数台の車は留め置ける。ゲートが閉まっている時に利用できる。

写真２　図１，図２中に記した文字Ｐの所である。林道はこの所で大きく左に曲がっている。目の前に砂防ダムがある。この所から、徒歩で沢登りとなる。この付近の道幅は結構あるので、ここに車は留め置けよう。

写真３　沢の右岸にあった石垣組跡。同様なものは幾つもあった。昔の道であったのは確かなようである。が、何のため？　これほどの土木作業をしたと言うことは、上流にそれなりの（＝投資に値する)「鉱山」があったからかもしれない。
因みに、地形図である図１，図２中に記されている、沢の右岸上部に沿って延びている林道は「新道」、沢の右岸の河床水準に沿って延びていたと推断できる、この沢道が「旧道」であったと判断した。

写真４　沢登り途中の一葉。沢と言うよりは川と行ってもよいほど、幅は広く、傾斜も緩い。殆ど不安なく沢登りができる。

写真５　沢の左岸にあった坑口跡。位置は沢床水準である。入口周りには現在でも大きな木が無いので、「当分」は木々に隠されることは無いであろう。下半分は、土砂で埋まっていた。多分増水時に流れ込んだのであろう。中の様子は次の写真。

写真６　その内部。壁面は非常に綺麗である。坑底は土砂が堆積し、高さは低くなっている。坑道は左にゆっくりと曲がり、先に続いているようである。このような坑道は前方にある鉱脈への通道坑らしいことを想像させるが。奥には入り込んではいない。

写真７　図１に記したＥの所での一葉。沢は前方で２つに分岐している。「新道」の林道は左側の沢で終了しているようである。が、旧道は右側の沢の上流に延びているようである。その先は、未探査。

鉱物写真

なし。

参考文献

（１）「日本地方鉱床誌　関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、昭和４８年(１９７３年)。
（２）「栃木県地質図」、２０万分の１、栃木県、工業技術院地質調査所、昭和３８年、内外地図株式会社。」
（３）「藤原町史　通史編」、藤原町、１９８３年。
因みに、この文献には、大正９年刊の「藤原村誌　前編」には、幾つかの鉱山が紹介されている、ことが記載されている。